

新島襄と私

安保 貴史	同志社大学工学部工学研究科生
講師紹介【あぼ・たかし】	

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」

(マタイによる福音書 七章七－八節)

新島メモリアルウォーク

おはようございます。安保貴史です。よろしく願いいたします。まず皆さまに聴いていただきたい曲があります。そちらをお聴きください。

“ We ‘re walking on a long long - trail ”

先の見えない長い道を 俺達は歩み始めた

想いは個々に違うから ぶつかり合うときもあったね

肩から感じた 息遣い・熱い鼓動

腹の底から叫んだ ここではやめない 終われない 見つめる先の景色

We ‘re walking on a long long - trail

たとえそれが茨の道で足が傷ついて血を流しても

君がいれば笑って行ける

We ‘re walking on a long long - trail

迷うことはやめ確かめにいこう

ここにいる理由 すべての始まりを

動き出したこの気持ち 隠すことなく信じよう

風に乗るそのリズムは 感じるままに高らかに

耳を澄ませば(聴こえてくる)ざわめく深(たに)と雨音

陰閉じれば(浮かんでくる)夏の嵐にしなる木々 飛沫(しぶき)をあげる白い滝

We ‘re walking on a long long - trail

弱さが辛いなら立ち上がれ

別れの後には描いた夢へと 独りで歩むしかない

Someday , we ‘ll meet together AND sing our song

過去の詰まった古いビンなら そんなものなど捨てちまえ彼方に

新しい出会いが待っている

今お聴きいただいた曲は、“ We ‘re walking on a long long - trail ”という曲です。新島メモリアル・ウォークに参加した学生で制作いたしました。作詞が私、安保貴史で、作曲は角田彰久んです。アメリカに旅立つ前に作ったのですが、我ながらよくできていると感心しています。

新島メモリアル・ウォークというのは、ニューイングランドに同志社のルーツを訪ねる創立一三〇周年記念プロジェクトです。当初のプロジェクト概要は、創立者・新島襄が日本にキリスト教学校の設立を訴えた米国バーモント州ラットランドから、新島の母校、マサチューセッツ州アーモスト大学までのおよそ一三〇マイルを、交通機関を一切使わず、自らの足のみで踏破するというものでした。

主催者が一定の枠組みを用意するプログラム形式ではなく、参加者が自らの意志で方法論を考えるエクスペディション(遠征)方式をとるとのことでした。大学が何をしてくれるかではなく、自らがこのプロジェクトにどう貢献できるかを考え行動できる人を募集していました。

なにやらまた面白いことを学生支援センターは企画しているぞ、という軽い気持ちから説明会に行くことにしました。

なぜ歩くのか？ニドルの農夫

なぜアメリカを歩くのか、初めに疑問に思うところであると思います。

百三十年余り前、一八七四年秋のアメリカ・ラットランドでの出来事。第六十五回アメリカンボード年会が開かれ準宣教師として帰国の挨拶に立った新島は、「日本に教師と説教師を養成するキリスト教主義の学校を創りたい」「設立するのに十分な援助が得られるまで私は着席しない」と、かねてからの大志を涙ながらに語り献金を訴え、千ドルを最高に何口かの献金がその場で集まり、寄付金総額は五千ドルとなりました。演壇を降りる新島に「あなたの学校のために」とみずぼらしい身なりをした老農夫がニドル札を差し出したのです。それは帰りの汽車賃で、その夜農夫はグレース教会から自宅まで、歩いて帰ったといわれています。このときの出来事が、若き新島に学校設立の成功を確信させたといわれており、同志社創立にまつわる有名なエピソードになっています。

このエピソードになぞらえて、同志社の歴史の末端にいる自己存在を「歩く」ことで体感しようと企画がスタートしたそうです。創立一三〇周年だから銅像を建てて終わり、記念パーティーをして終わり、というのでないところが同志社のよいところです。学生になかなかできない体験をさせて鍛えてやろうという気概を感じました。

計画の変更

当初は、創立一三〇周年だから一三〇マイル(約二〇〇キロ)を交通機関を使わず踏破するというものでした。しかし、プロジェクトを進める中で、全道程を踏破しようという計画も法律上・安全上の考慮により、距離を減らして踏破する方向に、話し合いの結果決まりました。

その結果、グレイス教会での決意式後、アーモスト大学での記念式典までの五日間、農夫・ラットランドの人びとの良心を思いながら八〇キロのアパラチアントレイル・パートウォークを行い、同志社のルーツ・自らの使命を考えるという概要になりました。

新島メモリアルウォークの実施期間は、九月十日～二十日の十日間。募集時に十万円程度に抑えられるように計画するとされていた費用がオーバーしたのは痛かったです。

日程

九月十日	ボストン集合
九月十一日	ボストン～ラットランド
九月十二日	グレース教会で記念イベント後、踏破隊出発
九月十二～十六日	アパラチアントレイルのパートウォーク
九月十六日	ゴール後、ジョンソン・チャペルで記念イベント
九月十七～十九日	自由行動
九月二十日	ボストン解散

ニューイングランド・アーモスト大学

同志社のルーツである米国ニューイングランドは、今もなおピルグリム・ファーザーズが持ち込んだピューリタン精神が色濃く残る土地です。ピルグリム・ファーザーズ（Pilgrim Fathers, Pilgrims、巡礼始祖の意）とは、アメリカに渡ったイギリスの清教徒（ピューリタン）のことです。十六世紀、イギリスのエリザベス一世がイギリス国教会を確立し、教会の改革を主張する清教徒は弾圧を受けるようになりました。信仰の自由を求め、亡命した清教徒を含む一〇二人が、メイフラワー号に乗って渡ったのが、ニューイングランドの地でした。

宗教的な見解の違いもありましたが、アブラハムの子孫に約束されたカナンの土地であるかのような豊かな土地が、彼らの定着の成功につながりました。そんな彼らの子孫が、独立戦争を経て世俗化する教育を愛い、真のピューリタニズムあふれる大学をと、「敬虔の念と才能を持った貧しい青年を牧師にする」ことを目的に作られたのがアーモスト・カレッジでした。アーモストの名は、北軍の名将ロード・ジェフリー・アーモストに因んだもので、会衆派教会と密接な関係を持ったリベラルアーツカレッジです。新島の入学は、その設立後五十年近く経ってからのことでした。

ラットランドからアーモスト大学までは、「アパラチアン・トレイル」という道を行きました。かつてはネイティブ・アメリカンが歩いた道で、南はアラバマ州から北はメイン州を越えてカナダのラブラドル地方にいたる、全長三五〇〇キロにおよぶ古道です。現在はトレッキング・ルートとして整備されています。この道を五日かけて八〇キロのパートウォークを行いました。アメリカの雄大な自然が手付かずのまま残るすばらしい道でした。

出発前の練習と合宿

「参加者が自らの意志で方法論を考えるエクスペディション（遠征）方式をとる。参加を志す人は、大学が何をしてくれるかではなく、この遠征に何を貢献できるかを考えてほしい」。

隊員募集を打ち切った五月の段階で、五十八名の参加希望者が集まりました。募集の段階から計画を進めていけばよかったのですが、慣れないエクスペディション方式というシステムに、集まったメンバーは戸惑うばかりでした。普段、答えのある問題をどれだけうまく処理するか、そればかり追っていたということがよくわかりました。与えられた条件はプロジェクトの概要のみ。当初の会議では、大学側が何をしてくれるかに終始していたように思います。プロジェクトが進み出したのは、組織として役割分担を決め、それぞれの班を作り、小さい単位で担うべき仕事を進めていこうと決まってからでした。隊員の体力を向上させ、歩くことをメインに貢献する「歩き班」、現地での情報を収集し、現地でのウォークの成功を考える「現地班」、同志社および新島精神に関して隊員の啓発を担う「新島班」。私は「二〇〇キロをみんなで歩けることが大事だろう」と思い、歩き班の班長を買って出ました。

参加学生をどう決めるか。大学側が想定していた現地で歩く参加者の人数は、十名前後ということがわかり、それに沿う形でメンバーの絞り込みの検討が始まりました。参加者の絞り込みは個人の隊への貢献を競争させるようなサバイバル的な様相を見せ、会議では険悪なムードが流れるようになっていました。建設的な会議ではなく、時間を浪費するだけの会議は正直辛かったです。

当初の計画がアメリカの地を一三〇マイル（約二〇〇キロ）歩こうというものであったこともあり、二〇〇キロ歩ける体力をつけることが必然的に参加の条件になりました。そこで不定期で行っていた練習会を五月から毎週行うことにしました。その練習ウォークの総距離が一〇〇〇キロに上るまで、各週土日に一回当たり二〇キロから五〇キロの距離を歩きました。

練習会を通し歩く中で、長い距離を歩く大変さを共有し、一緒に乗り越えたという達成感からメンバーの気持ちが一つになっていくのを感じました。練習会を通してパーソナリティーが見え、歩くことで仲良くなっていったメンバーが参加者に選ばれた気がします。

参加者が決定してからも歩き続けたのは、やりすぎだったのではないかと今になって思います。歩くことに重きをおくメンバーが集まったことで、四日半で二〇〇キロ歩ける体力ばかりを追い続けていた感は否めません。

練習会の延長で二回の合宿が行われました。炎天下の八月中旬、四日間で一三〇キロ歩いた京田辺合宿では、仲間としての意識が強烈に芽生えるものになりました。アパラチアン・トレイルを想定して行った熊野古道合宿は、雨の続く中での踏破でしたが、自然の中、荷物を持って歩くことの大変さを体感できる良い機会になりました。

新島メモリアルウォークを通して得たもので一番大きかったのは、出発前の春から夏にかけて歩くことを通してできた仲間です。これから一生続く人間関係ができたと思います。

We ‘re walking on a long long - trail

冒頭で聞いていただきました、“We ‘re walking on a long long - trail ”という歌ですが、これは出発前に「何かひとつ自分たちに残せることはないか」という思いから、メンバーで作ったものです。二つの合宿を通して、出発前の思いをこの中に全部ぶつけられたというふうに思っています。何を言いたいのかわからないような歌詞ですが、自分にとつては、すごくよいものに仕上がったと思っています。

We ‘re walking on a long long - trail

たとえそれが茨の道で 足が傷ついて血を流しても

君がいれば笑って行ける

京田辺合宿では、初日にマメができ、二日目の午前中に足裏の痛みで動けなくなりました。その場で足にできたマメをつぶし歩けたのですが、後の一步一步はひどい痛みでした。痛みがプライドを上回り、リタイアを考えたときに気づいたのです。

前日から痛めた足をかばいながら歩く職員と、靴擦れし踵を痛めながら歩く一年生、この二人は自分よりもはるかに痛みに耐えている。「この二人は痛みに耐えて頑張っている」ということに、なにかしらの感動を覚えました。自分はこの二人の仲間が歩けるようにサポートしよう、彼らが歩けなくなるまで一緒に歩こう、という考えに変わってから嘘のように歩けるようになりました。

We ‘re walking on a long long - trail

迷うことはやめ確かにいこう

ここにいる理由 すべての始まりを

同志社の原点ともいえる新島メモリアル・ウォークに参加したいと思ったのは、想像の中のグレース教会があったからです。私は中学・高校とも同志社系列校に通いました。中学一年生の聖書の授業で、新島襄のことを勉強しました。「美しい心の結晶」というタイトルで、新島襄がグレース教会で同志社大学設立のために寄付を募る場面があります。ニドルの老農夫の話の少し前のところで、いい話が續くのですが、その素晴らしいチャペルで三千人の聴衆の前、熱い涙をもって語った場面というのが、すごく印象的でした。そこをぜひ見てみたいと思っていたことを、この企画を知ることで思い出しました。そしてぜひ行ってみたいとなったのです。参加者の絞り込みの段階では、一、二年生こそ優先的に行くべきだと思っていたので、参加を辞退しようと考えていました。しかし、一緒にアメリカに行こうと言い合った仲間ができてから、その考えは止めることにしました。その気持ちは二番に当たる部分につながり、熊野古道合宿での体験と感じたことが続きます。歌を解説するのは無粋なのでここで止めます。後で聴いてください。

若い新島襄

実際アメリカでの行事は、歩くことが苦ではなく、すばらしい自然の中、修学旅行気分でした。日本での練習が過酷なものであったこともあり、本番ウォークはご褒美のようでした。歩きながら、建物を見ながら、行事を通して話を聞きながら、新島襄ってどんな人だろうと考える時間がたくさんありました。

新島襄は二十一歳で函館から脱国してアメリカに渡ったわけですが、何を考えていたのでしょうか。二十一歳で死罪を恐れずにアメリカを目指した、この根底になったのは、その当時、禁書だった聖書を知ったことでそれを深く知りたいという衝動が彼を動かしたのだと言われています。本当にそれだけなのでしょうか。私はそれだけではないと思います。はじめから聖書一筋だったとは思えません。

アメリカで歩きながら、夢見る無鉄砲な若者がいだけだと考えるようになりました。限界のある人生よりも、面白そうな道を選んだ若者だったのだと思うようになりました。

江戸幕府がずっと続いたとして、自分の先が、将来が見えている現状というものを打破したかったのだろう。何も行動しなくてもこのまま生きていけるだろう、でもお父さんやお祖父さんのような生活はちっとも面白くなさそうだ、なんて考えたと思います。

遠い外国の、自分たちの国と全然違う国を見たい。強く、華やかで、きっと素晴らしいだろうという憧れみたいなものがあつたのではないかなと思いました。

憧れているだけでなく、いざ飛び出せたのは、彼の無鉄砲さです。当時の新島襄は、すごく血気盛んな人だったのではないのでしょうか。いま自分は二十四歳ですが、自分が二十一歳のときにそんな思いをもって、死ぬかもしれない何も分からないところに飛び込んで行こうと、果たして思えるのだろうか。初めから新島襄が人格者で、器の大きい人には思えないのです。何かすごく視野が狭いというか、思い込みが強く、好奇心旺盛でこれしかないというような血気盛んな若者だったのではないかと思います。ロクな人でもというのでしょうか。

手がかりであった聖書を知りたいという新島の思いは、出会った人たちに、神に使命を与えられた人と受け止められました。聖書を知りたいという思いには、不思議な力がある、そう新島は気づいたのでしょう。その積み重ねが確信に変わった。神の見えざる手（Mysterious hands）に導かれていることに気づいたことでキリスト者になったのではないだろうかと思います。聖書を学ぶことに対して援助してくれる人びと。聖書を学ぶことで、自分はなんとキリストの神様に祝福されているのかと思ったに違いありません。自分につけられた名前ジョー（ヨセフ）の行った働きを知ったときにはきっと驚いたと思います。

新島襄と私

新島襄はなんてラッキーな人なのだ、類まれな幸運の持ち主だと思っていました。

新島襄の話を知るとどう考えても、すごくラッキーなことばかり起こる人です。タイミングを掴んでいるなあと思います。その当時脱国して死罪になった人がどれだけいたかは分かりませんが、その中でも一番縁に恵まれていました。アメリカへ行きたいと思ったら函館行きの船があるということを知りそれに乗せてもらえる、函館に着いてからは、外国人とコネクションを持っている方と出会い力になってもらう。船長を紹介してもらい、その船長もまたアメリカ行きの船長を紹介してくれて、その船長の伝（つて）でハーディーさんと出会い、教育を受けさせてもらう。何も持っていなかった若者に対して、これほど協力してくれる人が周りにいた。

しかし、彼がラッキーだったと思うのは軽率であることを知りました。彼が自分で行った業ではなくて、神が彼に行かせたことだったということを知ったのです。聖書に力があることに気がついたことで聖霊の恵みが働いた。神様からの祝福が彼を出会うべき人に会わせました。自分のために人生を生きるのではなく、神の計画のままに神とともに生きることにしたから同志社は起こったのだ、私はこう思います。

すべてを捨てて求めれば、何も持っていない人ほど神は与えてくださる。今日の聖句、「求めなさい、そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる。誰でも求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたくものには開かれる。」私の好きな聖句です。

周りに援助する人がいたから新島がある。そのとおりなのです。しかしその人びとには常に神様がそばにおられた。その連綿が同志社であるということです。

新島先生が掴んだ真理、自分が得られた恵みは、キリストからきています。自分が得た経験や、もらった親切というものを、祖国の貧しいところに還元したい、この真理であるキリストの道を日本で広めたいという思いが、ますます強くなったのは間違いないと思うのです。彼が初めから日本をよくしたいと思って、そのテンションのまま創立につながったのではなくて、いろんな人との出会いの中でその思いが強くなって、思いが強くなるからまた手助けがあり、それが同志社を創立することにつながった。その事実が百三十年前にあったから、今こうして同志社がある。それで今自分がいて、二十四歳ですが、十二歳の時から同志社にお世話になっていて、自分の学生時代というのはほとんど同志社にいて、同志社にいるから今また、こここうして自分がいる。

「新島襄と私」という題ですが、彼と自分とは比べようのないほど大きな差があります。

比較するには、彼の生涯のいつと比べるかが焦点になってくると思います。彼は二十一歳で脱国して、二十二歳でフィリップス・アカデミーに入学させてもらい、それから二十九歳まで勉強し、三十一歳でアメリカを発ち日本に戻ってきています。それから同志社を創り、そして四十七歳で亡くなります。

今自分は二十四歳です。これから何ができるのだろうか。私は四十七歳よりも、もっと生きるでしょう。

私の中の新島襄は、死ぬ間際に描かれた有名な肖像ではありません。希望に満ちた若い新島襄です。先の見えない長い航海、何も持っていないけれど目の前の世界にわくわくしている青年です。練習宿宿でも、本番ウォークでも彼は一緒に歩いていました。辛いときには支えてくれ、楽しいときには共に笑った仲間です。

同志社の原点を探しに行ったのにも関わらず、なにが始まりか今も分かりません。初めは、グレース教会の同志社創立のための寄付の場面に始まりがあると思っていました。しかし、すべてが始まりであることを知りました。いろんなものの連続の中、積み重ねの中、やっと今の同志社がある。その奇跡の末にあることをすごく感じました。

老農夫の二ドルはとても小さなことです。しかし、その小さな善意の積み重ねこそが同志社を支えていることを、僕たちは覚えていなければいけません。一粒の麦が多くの実を結ぶごとく、同志社は多くの良心を持った人材を輩出していく必要があるように思います。

新島先生の伝えたかった真理は

しかし、ここで創立一三〇周年を考えたとき、疑問に思うことがあります。新島先生の伝えたかった真理は、今きちんと受け継がれているのだろうか。アメリカで掴んだ福音をながしにしているのか、ということです。

生命医学、スポーツ健康科学という新たな学部ができます。幼稚園から専門大学院まですべてがそろった総合教育機関です。ただ、この発展の中に同志社らしさというものはあるのでしょうか。大きくなればなるほど、人が増えれば増えるほど、ただの地方の私立大学に成り下がっていきっているように思われて仕方がありません。

良心教育に力を注ぐと言っていますが、一体何をしているのでしょうか。どのタイミングで良心を育む教育を大学が行っているのかわかりません。キリスト教主義教育が学内のどこに存在するのか、みんな知りません。

キリスト教主義教育の柱でもあるチャペル・アワーに誰も出席しません。学生が出席できるようにはできていないのです。毎週毎週、閑古鳥が鳴いています。出席したくても、必修の授業や、主要な選択科目と重なるカリキュラムの組み方になっています。新入生の履修登録相談を受けるアルバイトをしていたときのことです。「チャペル・アワーに出たかったがこれだと必修の授業とかかる」と新入生がもらっていました。

カリキュラムの組み方について申し上げたいのは、学生の立場に立っていないものになっているということです。各学部各学科でカリキュラムのフォームが違い統一されていません。履修登録の時期はいつも大混乱です。「他学部の授業に出られると困るので、わざと分かりにくく作っている」「文系の教授は朝学校に来るのがおっくうなので、必修に一講時は少ない」。真相はわかりません。

学内から殺人犯が出ました。私の同級生です。人を殺める前に大学として何かできることはなかったのか。同志社の誇り・良心教育は抑止力にならなかったのか。

「休学中の出来事だったから」「今の若い奴は何を考えているかわからん」「そんな奴一人はいるだろう」「たまたま同志社の学生で運が悪かった」。

この事件をそんな言葉で終わらせてしまっていないでしょうか。事件の後、対策になるようなことをしたのでしょか。

「産学連携・新しいプロジェクト」「法曹界に新しい人材を、ロースクール設置」「二一世紀に向けて新学部」など非常に華やかですが、自分は華やかでなくていい、地味でもいいと思います。一人ひとりの学生の心を救う、精神的な問題を解決する、そんな場所作りを力を入れてもらいたいと思っています。一人一人は大切である、と学内でよく耳にしますが、本当に学生一人ひとりを大切にしているのでしょうか。題目だけになっていないでしょうか。

新島襄を考えるのに参考にしたのが、大学からもらえるこの手帳です。この手帳の各月ごとのスペースに、新島襄の言葉が挿入されています。これを読むたび新島襄はすごいことを言っているなど毎回感心します。

新島襄の言葉というのは、押しつけがましくない言葉で気品があります。読んでいただければ分かりますが、グレース教会で涙を流した新島や、明治の初めに大学設立に奔走した新島に対して、自分たちは今、しっかり堂々と、彼の前に立つことはできるのかなというふうにかえさせられます。

私たち今の学生は、優柔不断で、姑息にも安逸をむさぼっていないか、退歩の策を練り、名利に汲々とし、輕薄兒の撒を踏んでいないか、己を捨てて身を忘れ、真実を愛する良心を育んでいるのか、ということを考えさせられます。また大学も、生徒と向き合い、その独自一個の才能を開花することに努めているか。一国の良心ともいうべき人々を養育することに務めているか。自治自律にして真の自由を愛し、邦家に尽くすべき人物を養成しているのか。学芸芸芸に長けただけの薄志弱行の学士を育てていないでしょうか。新島に恥じない私た

ちであることはできるのかなというふうに思いました。新島襄は同志社の中では英雄なのですが、彼が望んでいるのはその学生一人ひとりが英雄になることではなくて、良心を手腕に運用する、ひとつの国を組織する、すごく小さな部分であるけれども、良心をもって仕事に励み生活をする、そういう人物だと思うのです。自分自身大きいことができるかということを考えるよりも、自分のできる範囲で良心を持って、事に当たれるかということを考えていきたいと思うようになりました。

人を植えるは一〇〇年の計。同志社が完成するのは二〇〇年。一三〇年たった今、残された七〇年で同志社を完成させることは私たちの務めである。

二〇〇六年六月十四日 同志社スピリット・ウィーク

京田辺チャペル・アワー「奨励」記録